

日本大学図書館蔵『土左日記』の表記

―八行転呼音に関して―

狩野 理津子

序論 はじめに

紀貫之自筆の土左日記は、現在の所在は不明ではあるが、各種書写本の奥書を見ることにより、十五紀末までは確実に残っていたことがわかる。しかも、貫之自筆本を忠実に写本したという奥書を持つ、次の四系統の写本が現存（一部は影印で出版）している。

次に、四系統の諸本に関して簡単な書誌を述べる。

(1) ①藤原為家本（嘉禎二（一二三六）年八月二十九日の奥書あり。

自筆写本は昭和五九（一九八四）年発見。翌年に大阪青山大学蔵となる）／影印なし／但し一部カラー図版は弘文荘敬愛書図録Ⅱに掲載^{註1}／以下、引用に際しては「為」とする。

②為家本の忠実な写本である青谿書屋本（東海大学桃園文庫

蔵。為家自筆写本の発見までは、最良の本文写本とされていた）／影印は萩谷朴「土左日記」新典社影印本シリーズ他^{註2}／以下、引用に際しては「青」とする。

(2) 藤原定家本（文暦二（二三三三）年五月十三日の奥書あり）／自筆写本の影印は尊経閣叢刊『土左日記』他^{註3}／以下、引用に際しては「定」とする。

(3) 松本宗綱本（延徳二（二四九〇）年四月二十日の奥書あり。宗綱自筆写本は発見されていないが、その書写奥書をもつ次の三本がある）

①最も忠実な写本とされる日本大学図書館蔵本（慶長五（一六〇〇）年一月下旬転写の奥書あり）／影印は日本大学図書館影印叢刊『土左日記』他^{註4}／以下、引用に際しては「日大」とする。

②宮内庁書陵部本（慶長十一（一六〇六）年四月十九日に式部

卿八条宮智仁親王転写奥書本を、更に河野実頭が元和四（一六一八）年九月四日に転写し、元和八（一六三二）年八月十七日に中院通村本と校合、北畠羽林（通村弟の親類。後の三条西實條）をして朱筆小書にて注との奥書あり）／影印なし／以下、引用に際しては「[図]」とする。

③近衛家陽明文庫本（転写日付等の奥書はない）／影印なし／以下、引用に際しては「[近]」とする。

※「[図]」「[近]」に関しては一部の影印が池田龜鑑博士の著書^{註5}に掲載。

(4)三条西實隆本（明応元（一四九二）年八月貫之自筆本を大納言實隆書写の奥書。その本を、天文二二（一五五三）年三月二九日転写との奥書あり）／影印は橋本進吉博士の解説と共に古典保存会から出版他^{註6}／以下、引用に際しては「[實]」とする。

以上の書写年代を異にする由緒の明らかな四系統の写本は、貫之自筆本を忠実に写本したとの奥書を持つにも関わらず、A本では仮名表記されたものが、B本では漢字表記されていたり、或いは仮名づかいが異なっていたりするように、著しい本文の異同（変化）のあることが、既に池田龜鑑博士によって報

告^{註7}されている。

そこで、本論では池田龜鑑博士の詳細な書誌学的研究の対象から外れていた前述の宗綱本系写本のうち、最も優れた本文を持つと考えられている日本大学図書館蔵本を対象にし、特にハ行転呼音（語中語尾のハ行音のワ行音化現象）に関しての日大本の独自表記の特徴に焦点をあてて、書写年代（慶長年間（一五九六―一六一五）に、識字階級の人々の間で規範とされていたであろうと推測される「仮名づかい」の影響との関係を考えてみたい。

第一章 松本宗綱本系日本大学図書館蔵本の書誌

宗綱本系の日大本・書陵部本・近衛家本の三種類の写本には、ともに

此一冊依 仰以貫之自筆

本不違一字令書写之及数

反改誤者也

延徳二年四月廿日

権大納言宗綱

という共通の奥書がある。つまり延徳二（一四九〇）年四月二十日に、権大納言宗綱が貫之自筆本を「不違一字令書写」したという記述である。全く同じ文言の奥書がこれらの同系統の三本に共通しているということは、現在の所在は不明であるところの宗綱自筆写本に、この奥書が存在していたであろうことは疑う余地はない。

ところで、日大本には右の共通奥書（二四丁オモテ 五行）に続いて 二四丁ウラに三行

申出 御本假名遣以下不違一

字書写之畢

于時慶長五年庚子曆孟春下澣日

とある。これは「慶長五（一六〇〇）年一月下旬 宗綱卿写本（御本）の仮名遣をも一字も違えずにそのまま書写した」という意味である。

書陵部本には、宗綱本の共通奥書に続いて以下の奥書が続いている。

右奥書有之以 勅本不違一字令書写

遂勘合了尤可謂正本者也

慶長十一年四月十九日

此本式部卿宮御筆也而亦不違一字即時書写之

元和四年九月四日 實顕

ここでも「不違一字令書写遂勘合」「不違一字即時書写之」とあるように、「（宗綱自筆写本〓勅本を）一字も違えずに書写した」ことを繰り返し強調している。

なお、近衛家本ではこれら二本とは異なり

此本申出 禁中（以上六字を消す）

以禁裏御本書寫之然奥書

曰

（宗綱本に伝わる共通奥書 五行）

乍去「む」の字に「ん」を書「さ」の字に

「散」を書「す」の字に「数」をかき其外

当世之仮名使に不相応之間予

書改之よみよくせんかため也（括弧は引用者）

という奥書を持っている。この奥書の内容から、親本である宗

綱本には、近衛家本書写当時には既に用いられていない仮名づかいが使用されていたことがわかる。また、貫之の活躍していた平安時代中期に使われていた異体仮名を、宗綱本では字母を変えることなくそのままに書写していた可能性も含んでいる。

例えば「土左日記」の冒頭部の「為」では

（『弘文莊敬愛書図録Ⅱ』^{註8}より）

のように「ん」の仮名の右に「毛」、「す」の仮名の右に「数」、「ん」をミセケチして「毛」の振漢字が認められる。これは「青」にも殆ど同じ傍書（但し、「ん」のミセケチ部分はなし）がなされている。

これが「近」の奥書でいうところの異体仮名を書き改めたことなのである。この異体仮名の実態は、明応壬子（一四九二年）八月の三条西實隆書写本の奥書に「……古代猶科蚪（おたまじゃくし）末愚臨寫有魯魚哉……」とあるように、博識で知られる實隆でさえ見知らぬような字体のことを指すと考えられる。

る。

ところで「近」の奥書には、それに続けて「当世之仮名使」に合わないところをも「書改」めたと記されている。このことが「近」独自の奥書の中に「不違一字」の文言が見られない理由である。

したがって同じ宗綱本系統でも「近」は「日大」や「図」のように「不違一字」とは違った書写立場をとっていることが明らかである。

「日大」や「図」の二本は、写本に際して伝統的な「親本からの正確な本文の書写態度」^{註9}をとっていたのであり、仮名づかいは当然のこと、異体仮名の字体をもそのまま写していたと思われる。しかし「近」は「よみよくせんかため」に仮名字体を当時の代表的字母に改め、仮名を漢字に改めたり、また仮名づかいも、例えば

「青」はつかあまりひとひのひのいぬのときにかとす（かて数）
（十二月二日）

「近」門出春

「日大」「図」可とて春

「青」さを（散乎）させと そこひもしらぬ わたつみの
ふかきこゝろを きみにみるかな （十二月二七日）

〔近〕さ本

〔日大〕〔図〕さ越

〔青〕さけよきものとも（んのとも）、てきて（十二月二八日）

〔近〕物共

〔日大〕〔図〕物とも

〔青〕なほおなしとまりなり

（元日）

〔近〕猶

〔日大〕〔図〕な越

〔青〕かせによる なみのいそには うくひす（うくひ数）も

はるもえしらぬ はなのみそさく（二月十八日）

〔近〕鶯

〔日大〕〔図〕うくひす

〔青〕こよひかゝること、こわたかに（こわ多可尔）ものもい

はせず

（二月十六日）

〔近〕こハ多かに

〔日大〕〔図〕こわ多可尔

などのように、他の二本と比べて書写態度が大幅に変わっている。一方、〔日大〕の親本である宗綱本の書写者 松木（藤原）

（中御門）宗綱は公卿補任（国史大系）^{註10}等で見える限り

文安元（二四四五年）大永五（二五二五年）六月三日没、八十一歳。長享二（二四八八年）年に権大納言従二位に任ぜられる。

永正十二（二五一五年）年に任職（権大納言正二位）を辞す。

同十五（二五二八年）年に准大臣及び武家伝奏に任ぜられる

（未曾有事歟）との記述あり。法名は玄空。院号は陽照

院。著作として『陽照院儀同踏歌節会次第』がある。

との記述があるだけである。土左日記を写本したとされる延徳二年には、権大納言従二位の地位にあったと記録されている。

公務では武家伝奏であったことを除けば、文献書写などの文化

活動に關しての明らかな記録はない（手鑑大成等にも、伝承筆

者として収録の短冊が二、三残るのみである）。しかし、〔日大〕

の奥書に「御本」とあり〔図〕にも「勅本」、〔近〕にも「禁裏御

本」とあることから、宗綱本は禁裏所蔵になるほどの価値の高

い書写本であったことが推定できる。

貫之自筆本の、異体仮名までも忠実に書写した（「不違一

字」と推測される宗綱の写本、それをさらに厳正に書写したと

奥書に明記している〔日大〕と〔図〕は、額面通りに受け取る

と、異体仮名の字体や仮名づかいをも含めて、まったく同じ表

記・字体でなければならぬはずである。しかしながら、先に

述べたように、親本を同じくする同一系統の写本間にも多くの

異同が存在するのは、如何なる理由なのであろうか。

第二章 写本間の異同の生じる理由

前章であげた疑問（「不違一字」と奥書に記しながらも、表記や文字の違うこと）は、さらに別系統の写本である〔為〕〔青〕や〔實〕にも言えるはずである。

再び、土左日記の冒頭部分の二行を〔為〕〔實〕〔定〕をも加えてその校異をあげる。^{註11}

平とこんも数なる日記といふんのも
をむ那（な）ん（も）してみん（む）とて数（す）るなり

①平とこん（も）数（す）なる日記といふん（も）のを
④をむ那（な）ん（も）してみん（む）とて数（す）るなり
①乎とこ〔為〕〔青〕〔定〕

おとこ 〔日大〕

お登こ 〔図〕

男 〔近〕

をとこ 〔實〕

②数（す）なる〔為〕〔青〕〔日大〕〔図〕

春（す）といふ 〔定〕

春（す）那（な）る 〔近〕

す那（な）累（る） 〔實〕

③ん（も）の〔為〕〔青〕〔日大〕

物 〔定〕〔図〕〔近〕

も能（の） 〔實〕

④をむ那（な）〔為〕〔青〕

をむ奈（な） 〔定〕〔日大〕〔図〕〔實〕

女 〔近〕

⑤みん（む）とて〔為〕〔青〕〔日大〕

心みむとて 〔定〕

みむと亭（て） 〔図〕

ミンとて 〔近〕

見（み）んとて 〔實〕

⑥なり〔為〕〔青〕〔定〕〔日大〕〔實〕

な里（り） 〔図〕

也 〔近〕

〔定〕が、他の諸写本と比較して異同が大幅に多いのは、定家自らが考案した独自の仮名づかいを実践したものであり、表

記も書式も

句を書き大切よみやすきゆへ也

(下官集「假名字かきつゝくる事」^{註12})

という原理に基づいたものであるため、「為」「日大」「図」「實」などに見られる「親本からの正確な書写態度」とは別種のものと考えられる。宗綱本系でも「近」が他の二本と比べて異同が多いのは、その奥書の「書改之よみよくせんかため也」と通ずるものである。特に①の「を」とこを「男」、③の「ん(も)」の「を」「物」、④の「をむな」を「女」、⑥の「なり」を「也」と漢字に改めたのは、漢字を交えることにより、解釈しやすく(読みやすく)する目的に添ったものといえる。

また②における「定」の「すなる」を「すといふ」の改変は、サ変動詞の終止形に接続する「なり」は伝聞推定であつて、通説では「男も書く」と聞く日記(日本古典文学大系本・鈴木知太郎註)と訳されている。しかし、定家の言語形成期にあたる平安末期頃は、ちょうど連体形終止が増加してくる時期でもある。^{註13}

そのため、「すなる」は「するなる」の撥音便「すんなる」の無表記型の可能性も持つようになる。そうなると、「なる」を指定・断定の助動詞と解釈して、「男も書く日記」との解釈をも生

じてしまうことになる。定家は、そうした混同を避けるために、最善の方法として、「を」とこもすといふ」と書き改めたものと判断できないであろうか。

また、⑤の「してみむ」を「定」だけが「して心みむ」と改変したのも、平安末期頃に「てみむ」の「み(見)」が補助動詞化する時期と重なっていたために、この「み」が補助動詞ではなく動詞であることを強調したための改変と考えられる。

この二例は明らかに定家が誤読(誤解)されることを回避するために本文を改変したと考えるのもよいであろう。このように定家の書写態度は、常に後学の者たちへの正しい解釈の伝達を念頭に置いたものである。

第三章 日本大学図書館蔵本の独自表記

日本本の「ん(も・む)」や「数(す)」などの異体仮名の使い分けについては、既に今野真二氏に詳細な論文があるが、^{註14}ここでは今野氏の触れていない仮名づかいの違例をあわせて比較してみる。

これまで度々述べてきたように、「日大」の親本である宗綱本の奥書には、貫之自筆本を「不違一字」書写したと記されてい

る。さらに、「日大」独自の奥書にも宗綱本を「不違一字」書写したと明記されている。そうすると、単純に考えれば

貫之自筆本Ⅱ宗綱本Ⅱ日大本

という関係が成立するはずである。貫之自筆本も、宗綱自筆書写本も、ともに現在の所在は不明である以上、奥書の「不違一字」という記述を信用して、「日大」の表記こそが、貫之自筆本そのままである、と考えることは、ある意味では正しいと言えるかもしれない。

ところが、同じ宗綱本を親本とし、しかも同様に「不違一字」との奥書を持つ「図」と「日大」との間にあっても、次のような各種の異同が存在するのである。

〔青〕もとめしもおかす（お可数）

（元日）

〔日大〕を可（か）す

〔図〕を可（か）春（す）

〔青〕ゆくさきに たつしらなみの こゑよりも

おくれてなかも われやまさらむ

（二月七日）

〔日大〕をく連て

〔図〕をく礼て

〔青〕ふむとき これもちかふねのおくれたり（おくれ多り）

し
（二月十二日）

〔日大〕をくれ多里し

〔図〕をくれ堂りし

〔青〕そのおとをきゝて

（二月二六日）

〔日大〕をと

〔図〕を登

〔青〕あかつきにふねをいたて むろつをおふ（二月十一日）

〔日大〕おふ

〔図〕お婦

〔青〕わすれかたく くちをしき（くち乎し支）ことおほかれ

と
（二月十六日）

〔日大〕くちをし支

〔図〕くちをしき

〔青〕かせもふきぬへしと さわけは（佐わけは）

ふねにのりなむとす
（十二月二七日）

〔日大〕さハ遣ハ

〔図〕さ者遣者

〔青〕しひてとへは いへるうた
（二月七日）

〔日大〕志ゐて

〔図〕志ゐ亭

〔青〕くるしきにたへすして（多へ数して）
（二月一日）

〔日大〕 多へすし亭

〔図〕 堂へ春し帝

〔青〕 はねといふところ とふわらわのついでにそ

(二月十一日)

〔日大〕 つる(井)て

〔図〕 つ井て

〔青〕 しろたへの なみちをとほく ゆきかひて

われににへきは たれならなくに (十二月二六日)

〔日大〕 と越く

〔図〕 登をく

〔青〕 ものもてくるひとに なほしもあらで (二月四日)

〔日大〕 な越

〔図〕 なを

〔青〕 なほおなしところなり (二月八日)

〔日大〕 な越

〔図〕 なを

〔青〕 わすれかひ ひろひしもせし しらたまを

こふるをたにも かたみとおもはむ (二月四日)

〔日大〕 ひろいし

〔図〕 飛ろいし

〔青〕 くにはひとのこころのつねとして いまはみへさなる(み

へ散なる)を (十二月二三日)

〔日大〕 みへ散な流

〔図〕 みへ散なる

〔青〕 ふねのひともみへす(みへ数)なりぬ (二月九日)

〔日大〕 みえ春

〔図〕 み春

〔青〕 よふけて にしひむかしもみへす(みへ数)して

(二月九日)

〔日大〕 みえ須

〔図〕 みへ春

〔青〕 これをみおくらむとてそ (二月九日)

〔日大〕 みをくらん

〔図〕 みをくらむ

〔青〕 すみのえ わすれくさ(わ数れく散) きしのひめまつな

といふ (二月五日)

〔日大〕 ハす連くさ

〔図〕 ハ春礼くさ

〔青〕 うたぬしいとけしきあしくてゑす(ゑ数)

(二月十八日)

〔日大〕 えす

〔図〕 え春

同じ親本から同じ書写態度（「不違一字」）で「厳正に」書写したはずの二本の間にも右のような各種の異同が存在するということは、どのように注意深い書写活動であっても、一字一句間違ひなく書写することはできないということを意味していると考えられる。

そこで、今度は対象を仮名づかいの相違するものに絞って、池田龜鑑博士の研究成果をそのまま利用し、〔青〕を中心にして〔定〕や〔實〕も対象として諸本との比較を行なってみることにする。^{註15}

ハ行転呼音 は↓わ の場合

〔青〕 くさくのうるわしき（うるわし支） かひ いしなとお

ほかり
(二月四日)

〔定〕 うる者しき

〔日大〕 うるわしき

〔近〕 うる者しき

ハ行転呼音 ひ↓ゐ・い の場合

〔青〕 このわらはさすかにはちていはす しひてとへはいへる

うた
(二月七日)

〔日大〕 志ゐて

〔図〕 志ゐ亭

〔近〕 志ゐて

〔青〕 わすれかひ ひろひしもせし しらたまを

こふるをたにも かたみとおもはむ
(二月四日)

〔日大〕 ひろいし

〔図〕 飛ろいし

〔近〕 日ろいし

〔實〕 飛ろひし

ハ行転呼音 ふ↓う の場合

〔青〕 つきてくるわらはあり それかうたふ、なうた

(二月二日)

〔日大〕 う多う

〔図〕 う多う

ハ行転呼音 ほ↓を の場合

〔青〕 しろたへの なみちをとほく ゆきかひて

われににへきは たれならなくに
(十二月二六日)

〔定〕 とをく

〔日大〕 と越く

〔図〕 登をく

〔近〕 とをく

〔青〕 なほかみのたちにて あるしゝのゝしりて

(十二月二六日)

〔定〕 猶

〔日大〕 な越

〔図〕 な越

〔近〕 なを

※「なほ」の用例の残り七例については、註にて記載^{註16}

お↓を の場合

〔青〕 ゆくさきに たつしらなみの こゑよりも

おくれてなかも われやまさらむ (一月七日)

〔定〕 をくれて

〔日大〕 をく連て

へ↓え の場合

〔青〕 くるしければ なにこともおもほへす (おんほへ数)

(一月十八日)

〔定〕 おもほえ須

〔日大〕 おもほえ春

〔図〕 おもほえ春

〔近〕 おほえ春

わ↓は の場合

〔青〕 しほみちぬかせもふきぬへし とさわけは (佐わけは)

(十二月二七日)

〔日大〕 さハ遣ハ

〔図〕 さ者遣者

〔近〕 さハけ者

〔實〕 佐盤遣は

え↓へ の場合

〔青〕 きのふのことくに かせなみ みえす (み江数)

(二月一日)

〔定〕 へえす

〔日大〕 みへ春

〔図〕 みへ春

〔近〕 みへ春

〔實〕 見え春

語頭のわ↓は の場合

〔青〕 すみのえ わすれくさ (わ数れく散) きしのひめまつ

なといふ

〔日大〕 ハす連くさ

(二月五日)

〔図〕 ハ春礼くさ

〔近〕 わ春れ草

※ 語頭の「わ」↓「は」に関しては 第五章まとめの項で

述べる

※ 用例の補足に関しては 註17で述べる

第四章 日本大学図書館蔵本に転呼音表記が混在した要

因の解釈

日大本では転呼音表記された語は、前章にあげたように六語である。そのうち

①すべて転呼音表記されているもの(括弧内の数字は用例数)

うるわし(1) / しゐて(1)

②非転呼音表記と転呼音表記の二種類の形が併存するもの

とほく(3) ↓ とをく(1)

なほ(12) ↓ なを(8)

ひろはん(1) ↓ ひろいし(1)

うたふ(5) ↓ うたう(1)

右の①・②について、土左日記の書かれた時代に、他の文献

ではどのように表記されているかを調査してみる。

「うるはし」を「うるわし」と表記するのは

妹 有留和之久(興福寺本日本霊異記 上巻・二〇)

彩 ウルワシク(西大寺本金光明最勝王経 二〇四ノ一

八)

のように「平安初期の国語資料では、「ウルハシ」といふ語を、例外無しに「ウルワシ」と記してゐる^{註18}」と報告されていることから、貫之自筆本も最初から「うるわし」と表記されていた可能性も捨てられない。青谿書屋本が「うるわし」と転呼音で表記されていることも参考になる。

「しゐて」についての平安時代の転呼音表記例は

……ゆきいとふかゝりけり。しゐてかのむろにまかりて^{註19}

(元永本古今和歌集 卷十八・九七〇)

があり、俊成自筆の古来風躰抄にも「しゐて」が四例あることが報告されている。^{註20}②の「なを」については、「十二世紀頃になると「なほ」よりも転呼音化した「なを」表記が主流を占めて

くる^{註21}」ようである。

その他「とをし」の場合も同様であると考えられる。

そこでこのような仮名づかいの表記の規範となったと考えられる仮名遣書で、右の語群がどのようにに仮名書きされているかについて調査してみる。

調査の対象とした仮名遣書は、日大本の書写された時期に、最も権威をもって利用されたと考えられる行阿著の『仮名文字遣』と、その増補版の『新撰仮名文字遣』の二書（五写本）を対象とする。他に参考として『一步』『和字正濫鈔』を参照した。

『仮名文字遣』の諸本は

東京大学蔵文明十一（一四七九）年写本^{註22}（東大本と略称）

福井久蔵博士蔵天文二（一五五二）年美濃木版本^{註23}（美濃版と略称）

陽明文庫蔵文禄四（一五九五）年写本^{註24}（陽明本と略称）

国会図書館蔵慶長（一五九六～一六一五）版本^{註25}（慶長版と略称）

『新撰仮名文字遣』は

国会図書館亀田文庫本^{註26}（『新撰』と略称）

『一步』は

静嘉堂文庫蔵延宝年間（一六七三～一六八二）板本^{註27}

『和字正濫鈔』は

元禄八（一六九五）年初刊本^{註28}（『和字』と略称）を参照した。

うるわし

仮名遣書の記述では、美濃版・陽明本ともに「うるはし 麗華麗」となっている。

『和字』には「麗 うるはし」とある。

しゐて

『仮名文字遣』の東大本には「しゐて 強」とある。美濃版・慶長版にはともに「しゐておる 強折」、陽明本には「志ゐて於る（漢字なし）」となっていて、ともに「しひて」ではなく転呼音形が仮名づかいとして選択されている。

『新撰』にも東大本と同様「しゐて 強」とあり、また「な支しゐに 愁」も、ともに「ゐ」の項にある。

なを

『仮名文字遣』の諸本とも、副詞の「なを」は見当たらないが、複合語には次のような用例があり、その大半が「を」の項に分類されている。

東大本には「を」の項目に「な越し 直衣」「なをさりかてら 等閑」「なをしの衣 欄衣」があり、「ほ」の項目に「なほ人 直人 頑人」とある。美濃版には「を」の項目に「な越しりかてら 等閑」「な越し 直衣」「な越しの衣 欄衣」「ほ」の項目に「なほき、直木」「すな本 淳直」「な本人 直人」とある。陽明本には「を」の項目に「なをし 直衣」「な越し能衣 欄衣」「な越しりかてら 等閑」「ほ」の項目に「な本き木 直木」「なほ人 直人」「春なほ 直」とある。

このように非転呼音形と転呼音形の二形が併存している。

慶長版は東大本と全く同じである。また『新撰』には副詞の「な越 猶」が「を」の項に分類されている。同書には、そのほか「な越る 直」「な越し 直 冠ノ直衣類」「な越しり 等閑」とあって、すべて転呼音形のみである。

『和字』には「猶 なほ 萬葉におほし。なをと書は誤なり」とある。契沖が「なをと書は誤なり」と注意をしている点が注目される。

とをし

東大本は「を」の項に「と越し 遠遼」「と越たうみの國 遠江」とある。

美濃版は「を」の項に「と越さとをの 遠里小野」「と越し 遠

遼」「をちこち 遠近」「をちかた 遠方」「まと越の衣 間遠衣」「と越たうみの國 遠江國」とあるが、「ほ」の項にも同じ「まと本の衣 間遠衣」の記載がある。

陽明本は「を」の項に「とをたうミ能國 遠江國」のほか「と越佐とをの 遠里小野」「をちこち 遠近」「をちかた 遠方」「満とをの衣 間遠衣」が加わり、慶長版も陽明本と同様である。『新撰』も「とをし 遠」であって「を」に分類されている。『一步』には「遠 とをき とをく とをい とをし とをう」とある。

『和字』には「遠 とほし 古事記萬葉和名等。とをしと書へからす」「遠江 とはたあふみ。和名」と記載されている。

ここでも契沖は前項の「なを」と同じく、「とをしと書へからす」と注意書きをしているのである。

ひろいて

『仮名字遣』の東大本では「ひ」の項に、非転呼音形の「ひろひて 拾」とあり、美濃版は、「ひ」の項に「飛ろひて ひろふとも 拾」、「ふ」の項に「ひろふ 拾撫」とある。陽明本では「ひ」の項に「ひろ飛て ひろふとも 拾」、「ふ」の項に「ひろふ ひろいとも 拾撫」となっていて、小書きではあるが、転呼音形の「ひろい」が加わっていることが注目される。慶長

版も同様である。

うたう

『仮名文字遣』の東大本には「うたふ」の語はないが、美濃版には「ひ」の項に「うたひて 歌テ」、慶長版にも「ひ」の項に「うたひて 歌テ」とあり、また『新撰』の「ひ」の項に「うたひ 唄 謡 謳」がある。しかし、転呼音形の「うたい」や「うたう」は見当たらない。

『二歩』には「うたふ」とある。

第五章 まとめ

ここまでみてきたように、日大本で転呼音表記されていた六語（うるわし・しめて・なを・とをし・ひろいて・うたう）のうち、平安時代初期から転呼音形であった「うるわし」を除き、残りの五語は、その大半（「うたう」は用例がない）が、仮名遣書に各々転呼音表記例を持つことが注目される。この日大本の書写者は、その時代の標準、つまりは当時の仮名遣書をひとつの規範として、書写活動をしていたと考えられる。「不違一字」と明記しながらも、その時代に広く用いられていたとされる仮名づかいの影響が無意識のうちに表われたのであろう。

なお、語頭の「わ」を「は」と書く、誤った回帰現象に関しても同じ説明ができる。先に述べた「誤った回帰」のうち、唯一の語頭例である「ハすれくさ」についても転呼音表記と同じ説明が成り立つ。『仮名文字遣』や『新撰』には、さすがに語頭の「誤った回帰」例は記載されていないが、十七世紀の仮名遣書の『一歩』^{註29}には

○ 上にかゝぬ假名の事

我^{はれ} 石^{ひし} 牛^{ふし} 縁^{へん} 鬼^{ほに}

という記述がある。^{註30}これは「上に書いてはいけない仮名」という意味であるが、この注意書きの存在する意義を考えると、この時期、「我」を「はれ」、「石」を「ひし」、「牛」を「ふし」などという「誤った回帰」に基づいた一種の仮名づかいがあった可能性を表わしている。このような習慣的な仮名づかいが存在したために、日大本の書写者は無意識のうちに、語頭の「わ」を「ハ（は）」と書写してしまったのではないだろうか。その根拠の一助として、「忘る」に「は（ハ）する」と振り仮名をしてある例を、^{註31}同じ文学作品からあげること、その証明としたい。

けきくつくとけいもおやけんくつりて
計れ土何耶半墓跡ふ念ふ還入而

思康鳴世成計利年月半に公終る者或揚志
くつひくあやめ

諾云而長同居

人者不知思我る實玉曼面影亦再寂身作
此女最久敷在而念見信而我將有云半計流
今忘忘草之粒半ぬ仁人へ公不府も哉

蒼草殖与ぬ仁へ魂有念思計利常收ぬもる張勝

【註】

1 『弘文莊敬愛書図録Ⅱ』2ページ9ページ 弘文莊 昭和五九（一

九八四）年二月

2 本論では萩谷朴編『影印本シリーズ 影印本土左日記新訂

版』（新典社 平成十（一九九八）年四月新訂十一刷）を使用

3 本論では白石勉編『高知高等学校開校記念定家本土左日記
土左日記地理辨附解説』（敬文館印刷所 大正十四（一九二
四）年十一月発行）を使用

4 『土左日記 貫之作 土左日記奥附』日本大学図書館（便
利堂 昭和三八（一九六三）年二月）

5 池田龜鑑『古典の批判的處置に關する研究 I・II・III』
（岩波書店 昭和十六（一九四二）年）

6 本論では松尾聰編『校註 土佐日記』（武蔵野書院 平成五
（一九九三）年三月）を使用

7 註5に同じ

8 註1に同じ

9 浅田徹『「不違一字」的書写態度について』（『中世和歌 資
料と論考』明治書院 平成四（一九九二）年十月）

10 『公卿補任 第三編 新訂増補 国史大系第五十五卷』（吉
川弘文館 昭和十一（一九三六）年八月三十日）

『改訂・増補公卿辞典』（国書刊行会 昭和五二（一九七七）
年六月第二刷）

『公卿人名大事典』（日外アソシエーツ 平成六（一九九四）
年七月第一刷）

近藤敏喬『宮廷公家系図集覧』（東京堂出版 平成六（一九四）年）

『古筆手鑑大成 第九巻 手鑑（京都・龍興寺蔵）』（角川書店 昭和六二（一九八七）年八月）

『古筆手鑑大成 第十三巻 手鑑（石川県立美術館蔵）』（角川書店 平成五（一九九三）年九月）

『日本古典文学影印叢刊16 短冊手鑑』（貴重本刊行会 昭和五三（一九七八）年一月）

11 〔為〕は註1、異同に関しては註4及び5を使用

12 『國語學大系 假名遣一』（白帝社 昭和四十（一九六五）年一月）

13 土井洋一「第4章近代の文法 I 4活用」（『講座国語史 第四巻文法史』大修館書店 昭和五七（一九八二）年十二月）

14 今野真二『假名表記論攷』（清文堂出版 平成十三（二〇〇二）年一月）

15 註2・4・5・6を使用

16 《なほ》用例 七例

〔青〕あるものと わすれつゝなほ なきひとを いつらと、
ふそ かなしかりける
(十二月二七日)

〔定〕 猶

〔日大〕 な越

〔図〕 な越

〔近〕 なを

〔實〕 なを

〔青〕元日 なほ おなしとまりなり
(元日)

〔定〕 猶

〔日大〕 な越

〔図〕 な越

〔近〕 猶

〔實〕 なを

〔青〕二日 なほ おほみなとにとまれり
(二月二日)

〔定〕 猶

〔日大〕 な越

〔図〕 な越

〔近〕 なを

〔實〕 なを

〔青〕もてくるひとに なほしもえあらて
(二月四日)

〔定〕 猶

〔日大〕 な越

〔図〕 なを

〔近〕 なを

〔實〕 なを

〔青〕 かせなみやまねは なほおなしとくろにあり

(二月五日)

〔定〕 猶

〔日大〕 な越

〔図〕 な越

〔近〕 なを

〔實〕 なを

〔青〕 さはることありて なほおなしとくろなり (二月八日)

〔日大〕 な越

〔図〕 なを

〔近〕 猶

〔實〕 なを

〔青〕 なほこそ くにかたは みやられる (二月二日)

〔日大〕 な越 (本と振り仮名重ねてあり)

〔近〕 猶

〔實〕 猶

17 《お↓を》用例 四例

〔青〕 ふむとき これもちかふねのおくれたり (おくれ多り)

し

〔定〕 をくれたりし

〔日大〕 をくれ多里し

〔図〕 をくれ堂りし

〔近〕 をくれ多りし

〔青〕 そのおとをきゝて

〔定〕 をと

〔日大〕 をと

〔図〕 を登

〔近〕 音

〔實〕 をと

〔青〕 そのおとをきゝて わらはもおむなもいつしかと

(二月二六日)

〔定〕 おきな

〔日大〕 をんな

〔図〕 をんな

〔近〕 女

〔實〕 をんな

〔青〕 くちをしく (くち乎し) なほひのあしければ

(二月十五日)

- 〔定〕 くちおしく
- 〔日大〕 くちおしく
- 〔近〕 具ちおし具
- 〔實〕 くちおし具
- 18 築島裕『平安時代語新論』第二章第四項（東京大學出版会 昭和四四（一九六九）年六月）
- 19 この用例は遠藤邦基先生の講義資料の用例を使用
- 20 遠藤邦基「定家仮名づかいの世界——『ついに』を『つゐに』と書くこと——」（『大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文論集』和泉書院 平成十一（一九九九）年六月）
- 21 遠藤邦基「定家の表記意識——『なほ』を『猶』と書くことの意味——」（『井手至先生古稀記念論文集 国語国文学藻』和泉書院 平成十一（一九九九）年十二月）
- 22 山田巖編『駒澤大学国語研究資料第二 假名文字遣』（汲古書院 昭和五五（一九八〇）年六月）
- 23 註12に同じ
- 24 陽明文庫編『陽明叢書国書篇 第十四輯 中世国語資料』（思文閣出版 昭和五一（一九七六）年十二月）
- 25 註22に同じ
- 26 山田巖編『駒澤大学国語研究資料第三 新撰仮名文字遣』
- 27 註12に同じ（汲古書院 昭和五六（一九八二）年十一月）
- 28 註12に同じ
- 29 註12に同じ
- 30 遠藤邦基「誤った回帰——『私』^{わらわ}を『はらは』と書くこと——」（『奈良女子大学大学院文化研究科年報 第三号』昭和六三（一九八八）年三月）
- 31 高橋忠彦・高橋久子編「寛永二十年版真名本伊勢物語二十一段」（『真名本伊勢物語——本文と索引——』新典社 平成十二（二〇〇〇）年三月）
- （かの りつこ／本学大学院生）